

## 聞き取り調査

高等学部卒業生渡邊公人氏に聞く

# 私の人生は西南に育てられた

— まっすぐ歩くことを誓った直線会 —

実施日：2013(平成25)年9月11日

実施場所：長崎県佐世保市「佐世保ターミナルホテル」

語り手：渡邊公人氏

### 渡邊公人氏と高等学部の略歴

- 1935(昭和10)年4月 西南学院高等学部は3年制となり、文科は英文科、商科は高等商業科と改称
- 1941(昭和16)年3月 長崎県立佐世保商業学校卒業
- 4月 西南学院高等学部高等商業科入学
- 1943(昭和18)年9月 西南学院高等学部高等商業科卒業
- 10月 長崎高等商業学校海外貿易科入学
- 1944(昭和19)年4月 高等学部を西南学院経済専門学校と改称
- 9月 長崎高等商業学校卒業
- 10月 九州帝国大学法文学部経済科入学
- 10月 特別甲種幹部候補生として熊本陸軍予備士官学校入学
- 1945(昭和20)年6月 同校卒業後、見習士官に任命され姫路の護路兵団第二中隊に配属
- 9月 陸軍予備役少尉に任命され正八位に叙せられる
- 9月 九州帝国大学に復学
- 1947(昭和22)年9月 九州帝国大学法文学部経済科卒業

### ◇5人で作った「直線会」

私の家は代々商売をやっていたので、数えて私で5代目くらいです。そもそも1890(明治23)年に渡辺忠三郎という人が海軍士官を退役して佐世保の方に出てきて、渡辺旅館という旅行者相手の旅館

を駅前国道沿いではじめたのがきっかけです。それ以来、旅館業を中心に生計を立ててきましたので、私も旧制の長崎県立佐世保商業学校を卒業し、長崎高等商業学校<sup>1</sup>を受けたのですが、失敗して結局、1941(昭和16)年の4月に西南学院高等学部高等商業科に入学しました。

1 現在の長崎大学



▲アルバムを手に思い出を語る渡邊さん

この年の12月には、太平洋戦争が始まるというきな臭い匂いが漂っていました。

長崎高等商業学校は、旧制中学の商業学校の受験生よりも普通科の中学系統の人が多くて、難しかったという印象がありました。やはり普通科の学生の方が成績がよかったからです。当時、福岡高等商業学校<sup>2</sup>と西南学院高等学部がありましたのでどちらを受験しようかと迷ったのですが、西南には自由な校風があったので、私に合うのではないかと思います。西南を受験し、合格しました。そういうことで、福岡に出て行くんですが、やはり福岡の街には魅力がありました。西南に入ったら、私のクラスは全員が商業学校出身で、私は佐世保商業学校だったけ

れども福岡商業、久留米商業、鹿児島商業など商業学校の出身者ばかりが1つのクラスになりました。だから西南で一生付き合える友達、まさに親友ができました。

あのまま長崎高等商業学校に合格していたらどうなっていたか分かりませんが、私にとって西南が一番深い思い出があるんです。西南が私を形成したということははっきり言えますね。西南の全体的な雰囲気は自分の個性を尊重するというか発揮させる、そういう空気が学校全体にありました。今の学生さんには理解できないかもしれませんが、戦争の空気が高まる中で、抑圧されない西南の自由な学風、これがもう一番です。また実際にそういう雰囲気がありました。



▲商業科で仲がよかった学生時代の友人  
(左端が渡邊さん)

学友という言葉がありますけれど、私には親友ができたんですよ。鹿児島商業の沖羽稔君や久留米商業の稲益実君、福岡商業の村松央君と山本博之君。この4人の親友の存在は大きかったですね。そして「直線会」という会を西南の卒業前に作りました。卒業後も私たち5人の直線会は、直線的に人生を歩こうじゃないか、寄り道をせず、まじめにまっすぐに歩こうじゃないかと、そういうことを誓い合い、目標にしたグループでした。そして1回だけですけど卒業記念に冊子を出したんです。そして5人全員が寄稿して、それを1冊の本にして出しました。まあ自分たちの自己満足と言われればそうでしょうけど、西南の自由な校風がそれをさせてくれたんだと思います。あの時代に自分がやりたいことが自由にできた。だから友達も自由にできたし、直線会を作るのも自由。本当に西南でよかったと思います。

### ◇息抜きだったチャペル

西南の一つの特徴にチャペルの時間があります。チャペルに行くといっても何も負担はありませんでした。在学中、チャペルは毎日ありました。10時半頃か

らじゃないかと思いますが、時間的に30分くらいでしょうか、戦争が始まってからもありましたね。学生は出席が義務付けられていて、みんな行きなさいということだったと思います。中には海岸あたりを散歩してサボって行かなかった学生もいました。私はまじめに行っていて、百道の海岸でも散歩しようかとかいう気は無かったです。チャペルは赤レンガの本館の2階でありましたので、高等学部の校舎とは別の棟でしたから息抜きになってちょうどよかったんです。ですからチャペルは開放的で、押し付けられたという感じはなくて直線会のみんなもきちっと行っていました。別に何の抵抗もなく息抜きでちょっとチャペル行って、河野貞幹先生の説教を聞き、みんなで賛美歌を歌って気分がよかったのを憶えています。

高等学部の授業の思い出といえば、高木先生の銀行論や八田先生の経営論、大村先生の簿記や会計、それから英語の坂本先生などもよく覚えています。あとは水町院長先生と杉本学長先生。波多野先生の哲学も習いましたね。いつも和服を着られていて古武士然とした先生でした。みんなまじめでしたよ。私の場合、商業学校で学んだことが、西南で受けた授業で完成されたような感じでした。それが卒業後、非常に生きたんですよ。県立佐世保高等女学校の教員になった時にも役立ったし、それから東京に出て千代田証券の会計を担当した時は、簿記や会計など西南時代に勉強したことが役に立ちました。それがずっと生きているんです。今でも生きていますよ。

## ◇兵役免除の撤廃と学徒出陣

最初の頃は戦争が始まったと聞いても、それほど何かが変わるというようなことはなく、私たちは今までどおり勉強する毎日でした。ただ糸島の方で農作業の勤労奉仕などには行きましたけどね。それがだんだんと戦局が厳しくなるにつれて変わってきました。まず、大学や高等学部の修業年限が短縮になりました。私も入学して2年半の短い学生生活を終って、1943(昭和18)年9月には高等学部に繰り上げ卒業しました。そのときは楽しかった学生生活や友達と別れることになるので残念でしたが、ほとんどの卒業生はすぐに学徒動員で入隊したんです。当初、学生は兵役免除でしたが、ちょうど私が卒業する年に兵役免除がなくなって、いわゆる学徒動員がはじまりました。それが1943(昭和18)年の10月31日です。繰り上げ卒業をしたり、兵役免除が撤廃されたり、戦争が厳しくなるというのは肌で感じましたね。その年の11月末日までに誕生日が来て20歳を迎える人は徴兵検査を受けて入隊したのですが、私は生まれが12月22日だったために徴兵検査を受けられませんでした。その時は、何か取り残されたような気がして自分も行かなければという、学徒動員の思い出はそんな気持ちでした。だからお国のために志願しないといけないと。みんな友達も兵隊に行っていますね。

## ◇特甲幹への応募

それで1943(昭和18)年の9月に西南の高等学部に繰り上げ卒業しましたが、徴兵検査を受けられなかったため、次に長崎の高等商業学校の海外貿易科に10月に入りました。そこで1年間勉強して、そ

の次に九大に行きました。九大の学籍はそのままにして、入学したところで兵役を志願しました。私は1年遅れなのに徴兵検査が丙種だったので、すぐには入営できませんでした。丙種合格といって、甲や乙は兵隊に行くんですが、丙種は現役には不適だが国民兵役には適するというので、第一線には行かないんです。しかし考えてみるといつか丙種でも第一線に行かなければならないだろうと思い、それだったら特別甲種幹部候補生募集という別の道が陸軍にあったので、それを目指しました。

この制度は、1944(昭和19)年5月に定められ、高等教育機関に在学した志願者の中から兵科または経理部の予備役将校となる教育を受けるのが特別甲種幹部候補生でした。当時は特甲幹と略して呼ばれました。太平洋戦争終盤という切迫した戦局だったので、これまで以上に早く予備役将校を補充するために、速成教育に対応する能力があつて将校の地位にふさわしいという条件を満たすよう特に高等学校高等科以上の学校に1年以上在籍した志願者の中から試験を行って合格者を採用するという制度でした。

私も兵隊に行こうと決めていましたから、九大に入ってからすぐ特甲幹に志願して熊本の陸軍予備士官学校に入学しましたが、その間わずか9日間しかなくて、すぐ兵隊ですからほとんど勉強していません。そこに入ったのは全員学生でした。特甲幹は、兵としての軍歴をいっさい経験することなく、採用と同時に伍長の階級となり、直接陸軍予備士官学校などの軍の学校に入校し厳しい教育を受けるんです。兵隊で予備士官といったら結構厳しくて不条理なしごきみみたいなこともありました。大分県の大野原などの演習場まで行進したり、銃を持って匍匐前

進を長い時間やるんですが、疲れて遅れる者は殴られて、その1人の人間のために全員が責任を負われるんです。いわゆる共同責任でお互い殴り合うんです。1人が落伍をしたらその小隊全体でお互い向き合って、「やれーっ」という号令で殴り合いました。今では考えられず、暴力だと非難を受けますけれど、あの頃は当然でした。その予備士官学校に山下申六郎大尉という上官がいて、よく鍛えられましたけれどもみんな慕っていました。終戦後、その時の戦友が山下部隊長を中心として、数年前、部隊長が亡くなるまで、毎年20数人が集まりましたからね。軍隊で厳しかったころの昔話などに花が咲きますが、毎日毎日鍛えられて、同じ経験をした戦友です。私は今90歳ですけども杖も突かずに今歩けるのも、軍隊で足腰を鍛えられたからだだと思います。

### ◇新型爆弾と終戦

予備士官学校で6ヵ月ぐらいの厳しい訓練を受けて部隊へ配属になりました。1945(昭和20)年の6月に見習士官に任命され、それが姫路の護路兵団第二中隊という道を守る部隊の小隊長でした。それから宮崎に転属になり、そこの海岸線にアメリカ兵が上陸するのではないかというので展開していました。

兵隊というのは、自分というものや個性などといった考えはありません。兵隊になったら自分を捨てるといふ個性を殺さなきゃいけない。それが西南の学生時代とまったく違うんですよ。社会の規律に従って進んで行く、だから命令とか境遇に流されるんです。それで自分が戦って死んだって、それは自然な運命といふか成り行きといふか、そういうことになると思っていました。そして終戦の玉音放送を聴いたのは、宮崎の高鍋付近

の海岸の納屋の中でした。その前に長崎市に新型爆弾が落ちたという噂が広がったんです。何か分からないけど新型爆弾らしいのが長崎に落ちて大変だというニュースが伝わりました。ここにも落ちるかもしれないと思いましたが、しかし終戦はその原爆のニュースが伝わってすぐでした。残念でしたけど、しかしほっとしましたね。生きて帰るか死んで帰るか。戦争が激しくなって、やはり玉碎かなと漠然と思っていましたが、しかしあんまり深刻には考えませんでした。終わったなど。戦争というものは、やはり反対ですよ。兵隊に行った人は、もう戦争はしてはだめだとよく言いますが、私もそうで、二度と戦争をしてはいかんとと思っています。

### ◇九大で出会った古林君

終戦になって復員してから九大に復学したのが1945(昭和20)年の9月でした。1947(昭和22)年に卒業していますから2年くらい勉強しました。それから、復員してから九大で古林輝久君と一緒に勉強しましたけれど、その時は、まさか彼が西南の商学部の教授になるとは思わなかったですからね。卒業後、彼と西南で会いましたが、母校のこともあってとても懐かしかったことを憶えています。

1947(昭和22)年に九大を卒業後、高校の教員を経て、1949(昭和24)年に東京に出て、千代田証券に入社しました。それから1953(昭和28)年に実家に帰って旅館を手伝うことになり、翌年の10月から佐世保市役所で働くことになり、30年ほど勤めました。佐世保は造船不況で佐世保重工業(SSK)が倒産の危機にあった1978(昭和53)年ごろ、佐世保市が何とかしてSSKを支えてやらないと佐世保が衰退してしまうとの市長の考えで、市が



▲左端が渡邊さん、右端が古林さん

SSKを債務保証することになりました。その頃、私が佐世保市役所の商工課長をしていたので、民間の企業を市が保証するのは初めてだから、各市会議員を回って説得しなさいという指示がありました。それをきっかけに、通産省も立ち上がり、そういう主体産業が衰退しているから、何とか盛り返して不況を食い止めようじゃないかということですね。その時に、私が佐世保の代表みたいな形になりましたから、通産省の山口努課長にしょっちゅう呼ばれて事情を説明し、特定不況地域に指定されて、生まれたのが特定不況地域中小企業対策臨時措置法でした。そしてこれに国が予算をつけて下請け業者に仕事を回しました。それで助かった。そういうことがありました。1983(昭和58)年までの時限立法であって、これで下請け業者が助かったんです。また、三川内焼の伝統産業指定について国に折衝し、伝統産業会館も建設することができました。さらに食品団地、機械金属団地、陶磁器団地等の立地も推進したのはうれしいことでしたね。

#### ◇まじめな人生が一番

今の学生さんには社会に出て、まじめ

な人生を送ってもらいたいと思います。西南の学生時代に内村鑑三の『後世への最大遺物』という本を読みましたが、これは1894(明治27)年に箱根で内村鑑三が講演した内容を記録したものです。その本には、「金、名誉、実績、作れる人は作った方がいいけれども、これは誰でもが作れるものではない。しかし誰にも残すことができる最大の遺物は自分のまじめな生涯だ、それが後世への最大遺物だ」とそういう内容でした。内村先生が言うように、まじめな人生を送るのが一番じゃないでしょうか。私もその考え方に大いに共感しました。卒業後もまじめにまっすぐ歩いていこうと誓い合った直線会も、この本の影響が大きかったと思います。前にも言いましたが、西南というもので私は形成された、今でもそういうような思いがあって感謝しています。確かに西南で得た学問や友達、生活それ自体で非常に役立ったけれども、一番は自分という人間の性格や人生が形作られたのは西南の学生時代だと確信しています。それは大きいですよ。だから若い学生さんたちにもまっすぐに進んで自分の人生をまじめに歩んでくださいと言いたいですね。